

これが、一年前の暮れ、「胃ろう」(PEG) 造設で延命の道をえらんだ結果である。

「ほんとうに、これで幸せだったのだろうか？」

と、考え込んでしまう。が、いまさら過去を追ってみても詮無いこと。この現実を直視し、この現実を真正面から受け止めて立ち向かうほかはない。明らかに、いま、老々在宅介護は新段階にある。

1、急啓 デイサービス・「なごみの郷」様

【コメント】

これまでから、デイサービスは、大山崎町社会福祉協議会の、「なごみの郷」でお世話になってきた。ここは、遠く、1990年代の定年退職後に、自主的ヘルパーとして奉仕活動をおこなってきたいわば古巣。当時は、まさか、ここで自分がお世話になるなどとは夢想もしなかったろうに…。月、金の週間2回の利用だが、介護者にとっては、小さな息抜き時間だし、また、利用者・本人にとっては、仲間の存在を意識する刺激的生活空

間である。本質的に群れの動物―人間には群れの中に身をおいてこそ発揮できる隠れた能力がある。

介護新段階にふさわしい施設利用が求められている。

なにしろ、今回の入院以前の体調とは、まったくの様変わりである。その点の理解を得て置かねばならないからだ。「なごみの郷」は、様变わりの体には様变わりのサービスを期待できる施設である。

2015年12月25日

「なごみの郷」

阿久根 猛 様

有田光雄

平素は大変お世話様です。お陰をもちまして老々在宅介護も6年目の暮れを迎えました。これも、一重に「なごみの郷」の皆さんの献身的奉仕と人間愛のたまものと深く感謝しています。

有田和子は、二度目の脳梗塞からの生還以後は、以前と異なる困難な